

2018年世界学生フロアボール選手権大会出場報告

Report on Participation in the 2018 World University Floorball Championships

和田 菜緒

Nao WADA

1. はじめに

フロアボール (Floorball) とは、アイスホッケーから発祥した室内ホッケー競技でありスティックを使ってプラスチック製のボールを相手チームのゴールに入れて得点を競う団体競技である。スウェーデン語ではInnebandy、ドイツ語ではUnihockeyという名称である。フロアボールは主にヨーロッパで盛んなスポーツであり、スウェーデン、フィンランド、スイス、チェコなどでは、プロリーグも存在する。世界で登録されている選手が約36万人、レクリエーション人口としては349万人に及ぶ。また、シンガポール、日本、オーストラリア、ニュージーランド、韓国、アメリカなどでも行われている。現在、国際フロアボール連盟 (International Floorball Federation) を中心に2028年のロサンゼルスオリンピックの正式種目としての認可を目標として、世界的に競技の拡大、発展をしている。日本は、1983年から競技を始め、1995年にIFFに加盟し、世界で2番目の加盟国となった。1998年に第1回世界選手権大会が開催され、日本は第1回大会から出場している。現在、日本フロアボール連盟 (Japan Floorball Federation) には85のクラブが加盟し

ている。ネオホッケーなどと含めると国内の競技人口は約2500名である。試合は1チーム6人で行われ、通常1ピリオド20分間で第3ピリオドまで行う。コートは40m×20mの広さを持ち、周囲を高さ50mのフェンスで囲みコーナーフェンスには丸みを持たせている。ルールはアイスホッケーに似ているがフロアボールは防具を付けずに (ゴールキーパーは着用する) サッカーのようなユニフォームで競技をするため、アイスホッケーのように相手に強く当たってはならない。アイスホッケーのように選手の交代は自由にでき1チーム最大20人で構成される。ゴールキーパー以外のフィールド選手は、短時間において1回の出場に約1分～1分30秒で交代する。1回の出場で選手は激しい攻防を常に続けていくため運動量は非常に多いといえる。運動量はゲームの勝敗



に関係してくるが、ゲームの戦術や技術などによって差が生じる。ゴールキーパーはシュートを止めることが基本となり、縦4 m×横5 mゴールエリア内に体の一部（手や足等）が残っていれば手を使うことやスライディングでボールを止めることが可能である。ゴールキーパーはスティックを持ってはいけないポジションのためスローを行うことができるが、投げたボールはセンターラインよりも自陣内でフェンスや床などに当てなければならない。日本は、国際試合に初期の頃から出場している。

2. 世界学生フロアボール選手権大会／戦績

世界学生フロアボール大会派は、国際フロアボール連盟（IFF）が主催する大会で男女ともに試合があり、私はポーランドのウッチにて行われた“2018世界学生フロアボール選手権大会”に出場した。

男子が7カ国、女子が6カ国出場した。世界学生フロアボール選手権大会の予選は、男女ともA・Bグループに分けられて、各グループの総当りである。（表1）（表2）

五日間を通して順位を争う。男子は各グループの上位2カ国が準決勝に進むことができる。女子は各グループ下位2カ国が準々決勝に進み、勝者が各グループの上位2カ国をそれぞれ対戦相手とし準決勝に進むことができる。しかし、日本は、男女ともに準決勝に進むことができなかった。

男子は予選でフィンランドとチェコと同じグループだったが、予選3位となった。そして、順

位決定戦では、ポーランドとシンガポールと当たる勝利を収めることができず、今大会は7位という結果だった。

女子は予選でポーランドとフィンランドと同じグループだったが、予選3位となった。準々決勝では、スウェーデンとあたり勝つことはできず、順位決定戦では、シンガポールと当たったが敗戦し、今大会は6位で終えた。



また、今大会のベスト4は男子がチェコ・スイス・フィンランド・スロバキアの順で、女子がフィンランド・チェコ・スウェーデン・ポーランドの順であった。男子は2016年に行われた前回大会では決勝戦がスウェーデンとフィンランドでフィンランドが勝者だったが、今大会はどちらも決勝戦にいないという展開となり白熱した戦いであった。前回大会と比べると男女ともに決勝戦に進めなかった国のレベルが上がってきていると感じた。

日本は世界のトップの国と比べると技術の差や国の中での認知度の差など劣っているところがあるが、男女ともに世界トップの国から点数を決めることができた。また、大会を通して成長できたと感じられた大会であった。



表1 男子グループ

A	ポーランド	スイス	スロバキア	シンガポール
B	フィンランド	チェコ	日本	

表2 女子グループ

A	ポーランド	フィンランド	日本
B	スウェーデン	チェコ	シンガポール

3. 状 況

日本のフロアボールはまだまだ発展途上にある。私の定期的に行える練習は週に2～3日ほどしかない。そのほかは、ほかのチームの練習に参加することや、不定期に取ることができる体育館で自主練習をするというような形で日々練習を重ねている。競技人口が男女合わせて約450名であり、まだまだマイナースポーツであるため、フェンスを置いた正式な広さのリンクでの練習はほとんどなく、クラブのリンクはもちろんない。クラブチームになると社会人や学生がほとんどで練習に人数が集まらないというような、充実した練習は数少ない。また、コーチは経験がある現役選手や、現役から離れた選手などに指導してもらっているため現役選手はさらに練習時間が削られている現状である。現に、国士舘大学では、大学のOG・OBの方にコーチを依頼している。

日本代表として国際大会に出場しているが、遠征費は選手の実費である。また、代表の合同練習は週に1回程度のため世界との差を縮めるのはなかなか厳しいと思われる。しかし、各地でミニフロアボール大会や講習会などの普及活動が定期的に行われている。国士舘大学フロアボールチームも、小学校へ出向きフロアボール体験会を指導者として行った。日本のフロアボールは着実に成長している。



4. 今大会での国士舘大学の代表選手

今大会では、国士舘大学から男子が5名、女子が9名代表に選ばれ、日本代表コーチに須藤明治教授が就任された。(表3)



表3 2018世界学生フロアボール選手権大会 国士舘大学 出場選手及びコーチ

名前	学部	学科	学年
足立 吏	体育	体育	3年
後藤 礼衣	体育	体育	3年
島根 瑞紀	体育	こどもスポーツ教育	3年
篠田 麗奈	体育	こどもスポーツ教育	3年
佐藤 彩乃	体育	こどもスポーツ教育	3年
武 翔太郎	体育	体育	2年
奥隅 拓馬	体育	体育	2年
角田 聡太	体育	こどもスポーツ教育	2年
溝口 太基	体育	こどもスポーツ教育	2年
和田 菜緒	体育	体育	2年
森田 小百合	体育	体育	2年
高橋 映見	体育	こどもスポーツ教育	2年
渡邊 萌	体育	こどもスポーツ教育	2年
和地 桃果	体育	こどもスポーツ教育	2年
日本代表男女コーチ		須藤 明治	教授

5. 最 後 に

私は、今大会が始めての国際大会であった。私は、女子ゴールキーパーとして全試合フル出場し

だが、今大会を通して、日本と世界を比べたときの基礎力・技術・認知度の差を改めて肌で感じた。

しかし、1試合60分を4試合やりきったことは自分の成長にとってもいい影響を与えた。今大会では、チームが一丸となって戦うことや試合の入り方が大事なことを、自分が持つ能力を出し切ることなど様々なことを学び、体験し、体得することができた。今後は、この経験を活かし、日々の努力を惜しまず精進したい。普及活動などにも取り組み、経験を役立てていくことで、日本のフロアボールに貢献していきたいと思った。



参考資料

国際フロアボール連盟ホームページ
<http://www.floorball.org/default.asp>
日本フロアボール連盟ホームページ
<http://www.floorball.jp>